



Title	帝政末期のロシア自由主義における初期スラヴ派の遺産とその継承
Author(s)	竹中, 浩
Citation	阪大法学. 2024, 74(3-4), p. 287-307
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/99477">https://doi.org/10.18910/99477</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 帝政末期のロシア自由主義における 初期スラヴ派の遺産とその継承

竹 中 浩

## I はじめに

ソヴィエト期の近代ロシア政治思想史研究において主役となったのは、マルクス主義者を別とすれば、その先駆けというべきゲルツエンやチャルヌイシエフスキイのような民主派であった。これに対して専制と正教を絶対視する固い保守派は、民主派との間に思想的な交わりを持たず、全面的に否定されるべき存在であった。どちらとも接点を持ちながら両者の間で煮え切らない立場にあったとされるのがいわゆる自由主義者である。ソヴィエト期には彼らについて必ずしも深い研究がなされなかった。<sup>(1)</sup> 政治的にみてそれはやむを得ないことである。冷戦終結後、一時的に彼らに対する関心が高まったが、長くは続かなかった。そのため、帝政期のロシアにおいて自由主義的であるとはどういうことなのか、誰を自由主義者と呼ぶべきなのか、今日にいたるまで十分に論じられているとは言えない。

19世紀のロシアにおいて自由主義を論じるとき、通常想定されるのは西欧派の立憲主義者である。彼らを自由主義者と見ることに異を唱える人はいないであろう。<sup>(2)</sup> しかし、自由主義者を彼らのみに限定することは、ロシア自由主義の歴史をきわめて貧しいものにしてしまうおそれがある。自由主義の最終的な目標が市民的自由と政治的自由の制度的実現にあるとしても、帝政期のロシアでそれを可能にするにはその現実的条件への配慮が不可欠であった。特に重要なのはロシアの国民的意識との調和である。政府や社会との摩擦を最小限にする

うえで、自由主義的な価値がロシアの歴史や文化と矛盾しないとする論理を組み立てることが重要な課題となる。自国の歴史と文化への言及はしばしば保守的な印象を与えるが、それによってロシアの美点を誇る人たちを直ちに自由主義の範疇から除外してしまうことは適切とは言えないであろう。それゆえ当時スラヴ派（славянофилы）と呼ばれた言論人のなかにも自由主義者と認めてよい人は少なくないと考えられる。

もとよりこの名前で呼ばれた人々のすべてが自由主義的な立場をとったわけではない。Н.Я. ダニレーフスキーや K.H. レオンチエフのように、排他的な類型化に基づき、ロシアあるいはスラヴと西欧を全面的に対置する人々を自由主義者と呼ぶことはできない。これに対して、19世紀半ばのモスクワに現れたスラヴ派（いわゆる初期スラヴ派）の思想（スラヴ主義）に自由主義的な性格を認めることはそれほど困難ではない。たしかに、固い保守派と同様、初期スラヴ派の人々も正教と專制を重視する。しかし、初期スラヴ派には、固い保守派とは異なる特徴がある。

まず、彼らはキリスト教の中での正教の優越を説きつつもその普遍的意義を強調する。初期スラヴ派の年長世代に属する И.Б. キレーエフスキーや А.С. ホミヤコフは、人間の理想的なあり方、真正のキリスト教的伝統が正教ロシアに最もよく保存されていると考えた。ロシアの歴史と文化に根差してはいても、その理想は普遍性を持っており、ヨーロッパの他の地域にも適用可能であるというものがその基本的な考え方であった。

初期スラヴ派には政治体制についても特徴的な見方があった。民衆の生活文化に強い関心を持つ彼らは、国家権力を行使する政治の世界と生活文化の世界を切り離し、前者をツアーリに、後者を民衆に割り当てる。ツアーリと民衆の間には友好的な信頼関係が存在し、その関係にこそロシアの美質があるというのがスラヴ派の考え方である。彼らはツアーリの権力の無制限性を支持するが、同時に民衆に意見具申の自由を認める。政治体制としての專制は民衆の声を受け止めることによって正統性を持つ。これは、専制はそれ自体が正統性を持つという固い保守主義とは異なる考え方である。<sup>(3)</sup>

このような初期スラヴ派の特徴は、それ自体が自由主義的であるか否かは措

## 帝政末期のロシア自由主義における初期スラヴ派の遺産とその継承

くとしても、市民的自由や政治的自由の制度的実現という目標と親和的である。その限りで自由主義的な要素とみなしても差し支えないであろう。以下では、初期スラヴ派のこのような特質がその後の時代にどのように継承され、変容したかを見ていくことにする。それによって自国の歴史や文化に対する配慮と自由主義との関わりを具体的に浮かび上がらせることが本稿の目的である。

### II 正教と普遍主義

宗教思想において初期スラヴ派を代表するホミヤコーフは、「ソボールノスチ」という言葉で表現される、「真理と愛の生きた有機体」としての教会のあり方を説いた。<sup>(4)</sup> ホミヤコーフはこのような教会のあるべき姿を最もよく残しているとして正教を高く評価した。正教はキリスト教の伝統に忠実であり、カトリシズムやプロテスタンティズムが失ってしまった、自由と統一の調和のとれた関係をよく保存しているというのである。初期スラヴ派においてカトリシズムとプロテスタンティズムはともに批判の対象となる。しかしそれぞれに対する批判の性格は同じではない。プロテスタンティズムが批判されるのはそれが宗教的には懷疑主義や無神論に行き着き、社会的には個人の孤立やナショナリズムを招くからである。<sup>(5)</sup> 彼らの西欧批判が近代批判の側面を持つ以上、その議論は容易に理解できる。それに比べるとカトリシズム批判はより微妙である。批判はその権威主義的な側面に向けられるが、教皇の存在を別にすれば、正教との違いはそれほど明確でない。近代以前の歴史を理想化する教派として、両者はともに西欧近代に対する批判の根拠を提供する。

初期スラヴ派の若い世代に属する IO.Φ. サマーリンは、ホミヤコーフの主義主義的な宗教思想や教会観を継承し、信仰心や宗教的情熱を宗教の本質として重視した。1867年、サマーリンはホミヤコーフの著作『教会は一つ』への序文で信仰を形骸化させないことの大切さを説き、その観点からイエズス会の道徳論を批判した。<sup>(6)</sup> また、彼はロシア帝国内のポーランド人カトリックによる正教徒の抑圧に強い関心を持っていた。サマーリンの場合、帝国の中で正教が優越的地位を占めるべきことは当然であった。そのため彼の宗教論は政治的観点の

混入を免れなかつたのである。しかしサマーリンは教義の面でカトリシズムそのものに敵対的であったわけではない。1870年に開かれた第一バチカン公会議<sup>(7)</sup>は教皇不可謬説を強く打ち出したが、その受け止め方も冷静であった。

帝政期ロシアの最も重要な宗教学者の一人であるB.C.ソロヴィヨーフは、当初、初期スラヴ派の宗教思想を高く評価していた。宗教と政治の関係についての考え方においても、初期スラヴ派とソロヴィヨーフの間には共通するところが少なくなかった。<sup>(8)</sup> 1885年10月、ソロヴィヨーフは当時スラヴ派を代表するとみなされていたИ.С.アクサコフが編集する新聞『ルーシ』に、高名な教育家C.A.ラチンスキイ宛の公開書簡を匿名で発表した。そこで彼は「強制的」正教を批判し、刑事罰や検閲で正教会を守ることに反対した。政府の保護によって他教派との自由な議論を妨げれば、正教会は独善に陥り、国家機関の単なる付属物に成り下がってしまうであろうというのである。<sup>(9)</sup>

しかし既に1880年代の初めから、アクサコフとソロヴィヨーフの間には溝ができていた。1883年からソロヴィヨーフが穏健自由主義の雑誌『ヨーロッパ通報』に一連の論文を発表し、ナショナリズム一般に対する否定的態度を鮮明にするとともに、溝はいっそう深まっていく。論文の中でソロヴィヨーフは、キリスト教は各民族による自己否定の理念に立っており、すべてのナショナリズムを排除すると説いた。ロシアが行った自己否定の好例として、ソロヴィヨーフはピョートルの改革を積極的に評価した。この改革によってロシアはヨーロッパ文明の一部になったとされたのである。これは明らかにスラヴ派の立場とは相容れない主張であった。さらにカトリシズムに対する両者の考え方にも違いがあった。ソロヴィヨーフはスラヴ派が教皇主義を気にするあまりカトリシズムの美点を見逃していると考えていた。<sup>(10)</sup> ソロヴィヨーフがカトリシズムと正教の和解による教会の統一性の回復を訴えるようになると、アクサコフとの距離はいっそう広がった。

1886年にアクサコフが世を去ったのち、このようなソロヴィヨーフの主張を批判し、スラヴ主義をナショナリズムと同一視することに反対したのがA.A.キレーエフである。<sup>(11)</sup> キレーエフは宮廷に近い軍人であり、「赤い大公」として知られるコンスタンチン大公に仕えた。1860年代にはイギリス型の立憲君

## 帝政末期のロシア自由主義における初期スラヴ派の遺産とその継承

主制を支持していたが、その後「スラヴ主義の最後のモヒカン」となり、かつて初期スラヴ派が掲げた普遍主義の旗を、ソロヴィヨーフとは別の立場から守ろうとした。<sup>(13)</sup>

キレーエフの見るところ、現在のカトリック教会は自分たちこそが普遍教会であると考えており、正教との統合の必要性を認めていない。ソロヴィヨーフは正教会とカトリック教会の再統合をあまりにも安易に考えていると思われた。キレーエフも遠い将来教会の再統合が行われる可能性そのものは否定しない。しかし第一バチカン公会議で宣言された教皇不可謬の原則はその妨げになるものであった。彼はこの原則に反対して生まれたドイツの復古カトリック教会に期待をかけた。西方キリスト教に属してはいても、復古カトリック教会は正教<sup>(14)</sup>的な精神を持つことができるはずであった。

キレーエフにとって、かつてのローマ教会のように宗教が政治的権力を利用しようとするることは危険であった。本来教会は政治に関しては従属的役割のみを担うのであり、自らが政治的であってはならないのである。同様に政治が宗教に介入することもまた有害であった。国家と教会は緊密に協力しつつも分離しているべきであり、為政者は宗教的事柄に介入してはならない。悪しき先例として、キレーエフはピヨートルによる教会の政治利用を挙げた。彼にとって「カエサルのものはカエサルに、神のものは神に」こそが遵守されるべき政教関係の根本原則であった。<sup>(15)</sup>

ロシアと東方のつながりを重視するレオンチエフとソロヴィヨーフの関係は興味深い。レオンチエフは、ロシアが守るべき文化遺産は正教と共にビザンツから来たとする、ビザンツ主義の立場に立つ思想家であった。政治的には極端な保守派である。彼はヨーロッパの自由主義・平等主義を敵視しただけでなく、それに対して宥和的であるとして初期スラヴ派を非難した。初期スラヴ派が加担したような専制や身分制秩序に手を触れる改革は、レオンチエフには一切認められない。また彼にとって正教は愛や調和への希望とは無縁であり、地上の悪と苦痛に耐える従順さこそがその本質であった。もとよりこのようなレオンチエフの見解は、初期スラヴ派の流れを汲む人々にとって到底受け入れることのできないものであった。<sup>(16)</sup>

ところがこのレオンチエフとソロヴィヨーフの間には相互に一定の共感が存在していた。ソロヴィヨーフはレオンチエフが尊敬するダニレーフスキイをナショナリズムの思想家として攻撃したが、レオンチエフの著作に対しては一定の評価を与えていた。レオンチエフにとってもソロヴィヨーフのカトリシズムに対する関心は理解できるものであった。もともとレオンチエフにとって教会の権威を重んじるカトリシズムはプロテスタンティズムよりはるかに好ましい思想であったし、第一バチカン公会議で打ち出された教皇不可謬説も彼の嗜好によく合致していたのである。ソロヴィヨーフの唱えた教会再統合も、少なくとも個人的には、レオンチエフにとって共鳴できる考え方であった。<sup>(17)</sup>

後に立憲民主党の領袖となるП.Н.ミリュコーフは、ソロヴィヨーフもレオンチエフとともにスラヴ派の亜流であると考えていた。1893年1月、彼は「スラヴ主義の解体」と題する公開講義を行った。ミリュコーフによれば、かつてスラヴ派が行ったのは、実証主義や唯物論を特徴とするヨーロッパとは異なる倫理的原理の探求と提示である。ドイツ・ロマン派の影響と家父長制的社会秩序の残存という条件の下で、彼らは普遍的な倫理的原理とロシアの歴史的使命という相容れない二者を結合しようとした。その条件がなくなったとき、亜流がそれぞれの論理を突き詰めることになるのは不可避であった。ダニレーフスキーやレオンチエフのような右派がロシアの西欧との違いに専ら目を向けたのに対し、ソロヴィヨーフのような左派はスラヴ主義の普遍主義的側面を継承し、民族的エゴイズムの全面的批判を展開したとミリュコーフは論じた。<sup>(18)</sup>

スラヴ主義が左右に分裂し解体したというミリュコーフの認識に対して、ソロヴィヨーフは、自分をスラヴ派左派と呼ぶことに対して異を唱えるとともに、ダニレーフスキーやレオンチエフとスラヴ主義の間に共通性はないとして、彼らをスラヴ派右派と呼ぶことにも反対した。彼らと自分の思想をスラヴ主義として一括りにするのは「実証主義の歴史家」であるミリュコーフが議論における形而上学的な根の有無を考慮していないからだというのである。<sup>(19)</sup>

ミリュコーフにとってスラヴ主義は新しい時代のなかではもはや存続できない思想であった。彼がスラヴ主義の解体にこだわったのは、それがかつて持っていた現実的意味を失い、既に過去のものになっていると考えられるにも拘わ

帝政末期のロシア自由主義における初期スラヴ派の遺産とその継承  
らず、その延命を図ろうとする動きがあることに苛立っていたからであろう。ソロヴィヨーフも例外ではない。ソロヴィヨーフは西欧派に移行したが、軍国化や階級闘争の進む世俗化したヨーロッパの現実は彼の宗教的 ideal とは乖離しており、彼がそれを全面的に受け入れられるはずはなかった。抽象的なソロヴィヨーフの宗教哲学はもはや現実と関わる力を持たなくなっているというのがミリュコフの評価であった。<sup>(20)</sup>

### III ロシアの歴史的発展と專制

初期スラヴ派の專制觀には2つの特徴がある。1つは、ツアーリは民衆の声に耳を傾ける存在であると考えることである。ツアーリが民衆の声を聴く場として、初期スラヴ派の若い世代に属するK.C.アクサコフは歴史の中からゼムスキー・ソボールを引き出した。<sup>(21)</sup>ゼムスキー・ソボールはスラヴ派が理想とするモスクワ・ルーシの時代に開かれた会議である。そこでは民衆は意見を述べるのみでツアーリに何かを要求することなく、ツアーリの権力を制約することもない。それはロシア本来のツアーリと民衆の関係を象徴しており、憲法に基づいて君主の権力を制約する西欧の議会とは似て非なるものであるとされた。

もう1つの特徴は專制を絶対的なものとして固定的に考えないことである。農奴制の廃止に重要な役割を果たしたサマーリンは、制度の体系としての国家よりも生きた社会を重視した。民衆の現実の生活こそが大切なのであり、必要なのはそれに制度や形式を合わせることであった。農奴制を廃止するにあたっても、サマーリンは社会的現実を尊重し、一時的義務負担という暫定的な枠組みを採用した。人々の成長と変化を期待するサマーリンが特定の制度を固定し絶対視しなかったのは当然である。専制も例外ではなかった。<sup>(22)</sup>政治体制は将来に開かれているというのが彼の基本的な考え方であった。

同時代の学者にして歴史家であるB.H.チェーリンもサマーリンと同様保守的自由主義の立場をとったが、彼らの間には基本的な発想の違いがあった。チェーリンは歴史家である前に学者であり、その歴史理解は概念図式に基

づくものであった。原則に関わる部分では彼は容易に譲らなかった。

大改革期のチェーリンはロシアにおける国家の主導的役割を重視した。スラヴ派が礼賛した共同体も、彼の理解によれば、国家主導で導入されたものにすぎなかつた。国家は法制度という形で社会活動の外枠を与える。国家が上から制度を与えれば、その制度は自ずと力を持つはずであった。その制度がどのように、どの程度社会に根を下ろしているかという問題について、チェーリンはそれほど重視しなかつた。スラヴ派と異なり、伝統的な社会生活そのものに価値を認めることもなかつた。それでも、チェーリンはロシアの歴史発展が西欧のそれとは異なることを認め、英仏を比較するなど西欧の中の多様性にも注目した。歴史発展の独自性という点に関してはスラヴ派との間に共通性があつたのである。

チェーリンにとって、制度は必要に応じて変更されるべきものであつた。専制という政治体制についても、彼がそれを固定的に考えることはなかつた。大改革期には代表制の導入に反対したチェーリンであったが、1870年代末、彼は立憲主義に対する支持を鮮明にする。きっかけとなつたのは税制改革であつた。貴族の免税特権の廃止が議論されるにあたつて、彼は特権が廃止されるときには見返りが必要であり、さもなければ専制下の平等にいたると説いた。

「<sup>(23)</sup>民主的専制主義（демократический цезаризм）」を、彼は決して受け入れなかつた。

チェーリンは国家の役割の重要性を認めたが、国家が常にすべてにおいて主体たりうる（主体たるべきである）とは考えなかつた。国家の仕事は個人の自由の条件である安定した秩序を作ることまでであり、個人が活動を始めたら国家はその活動を控えるべきである。法と道徳を峻別するチェーリンは、『善の弁明』（1897年）で普遍的な善＝実体的価値の法による強制を認めたことに対してソロヴィヨーフを批判した。法の役割は個人の自由と形式的平等の保障に限定されるべきである。善を形而上学的に基礎づけることはできない。法の強制によって積極的に善を実現しようとすれば専制支配に道を開くとされた。<sup>(24)</sup>個人の自由はあくまで尊重されるべきであった。チェーリンにとってそれは実証を超えた大前提だったのである。社会主义は個人の自由を全面的に否

## 帝政末期のロシア自由主義における初期スラヴ派の遺産とその継承

定するものであり、チェーリンは決して受け入れなかった。モスクワ県参事会議長のД.Н.シーポフが試みたゼムストヴォによる財政調整も、社会に属するゼムストヴォが国家を真似ることであり、彼の自由主義とは原理的に相容れないものであった。<sup>(25)</sup>

歴史家としてのミリュコーフは、チェーリンの歴史学を継承・発展させた人であるとされる。もとより彼らの歴史学には基本的な性格の違いがあった。哲学の縛りや図式主義の傾向が強いチェーリンに対し、ミリュコーフは実証主義・歴史主義的な立場に立つ歴史家であり、社会学的な因果法則で歴史を見ようとする。自然科学と社会科学の間にも、彼は本質的な違いを認めなかつた。<sup>(26)</sup>それにもかかわらず二人のロシア史理解には多くの共通点がある。彼らは共にロシアと西欧の歴史発展のための条件の違いを重視した。西欧に比べ、ロシアでは移動・植民による空間的拡大の可能性が大きい。加えて社会の未発達ゆえ、国家による上からの緊縛が重要な役割を果たした。一般に、西欧に比べ、ロシアでは国家権力が上から多くをなすことができる。特に、過去において国家は外来の多くのものをロシアに成功裡に移植してきた。ピヨートルの改革はその最も重要な事例である。<sup>(27)</sup>そのように考える点は両者に共通している。

ミリュコーフは、後進的なロシアは多くを先進西欧から借用せざるを得ないと考えた。その意味で彼は西欧主義的であり、政治的には西欧の民主主義的制度を理想とした。<sup>(28)</sup>それを実現する上では憲法の導入が是非とも必要である。強力な国家権力と従順な国民を持つロシアは、これまでと同様成功裡に憲法を導入し、西欧と同様の政治発展の道に進むであろう。しかし、必ずしもミリュコーフにそれ以上の理想があるわけではなかった。彼は政治を相対的な価値の間での選択という実践的な営みとみなし、そのようなものとして政治に関わった。このように相対主義的な立場をとれば、チェーリンの場合とは異なり、社会主義との垣根も低くなる。状況次第で接近は容易であろう。

1886年からモスクワ大学の助教授を務めていたミリュコーフは、95年、ニジニ=ノヴゴロドでの講義の中で專制を批判したとして大学を追われ、行政流刑に処せられた。この間に主著ともいべき『ロシア文化史概説』の執筆を進めている。97年にはブルガリアのソフィアに招聘されるが、翌年、ロシア政府の

干渉で職を失った。さらに1901年には反政府的な演説を行ったとして数か月にわたり収監されている。

#### IV 専制と政治参加

1880年代初頭、スラヴ派の主張であるゼムスキー・ソボールが実現するかに見えたことがある。イグナーチエフ内相が推進し、新帝アレクサンドル3世も容認する態度を見せたのである。<sup>(30)</sup>しかし、結局この案は空しく潰え去った。断固として代表制に反対するボベドノスツェフとカトコーフが絶大な影響力を持ったアレクサンドル3世の時代には、代表制の形をとった政治参加の問題が現実味を帯びることはなかった。それでもそのような議論が全くなかつたわけではない。1890年にはスラヴ主義の継承者を標榜するキレーエフがゼムスキー・ソボール論を唱えた。専制護持を絶対視するボベドノスツェフやレオンチエフは革命に法的基礎を与えるとしてこれに反対であり、カトコーフの後継者B.A. グリーンゲムトも雑誌に批判の文章を寄せた。キレーエフは反論しようとしたが、検閲官のフェオクチストフによって論争の進展が封じられた。<sup>(31)</sup>

社会のなかで政治的気運が徐々に高まりつつあった1902年、キレーエフはあらためてゼムスキー・ソボール論を展開する。このときにも強い反対があった。露土戦争の際にセルビア軍を率いて戦ったН.И. チエルニヤーエフは、西欧の絶対王政や東洋の専制政治と同様ロシアの専制も制約されないところに力の源泉があり、ゼムスキー・ソボールを召集すればその権威が損なわれる<sup>(32)</sup>と説いた。自由主義的哲学者のチチェーリンやC.H. トルベツコイは、審議のために不定期に代表を集めて会議を開催してみても言論の自由を保障することにはならない<sup>(33)</sup>だろうと考えた。左右両方からの批判を招く案であった。

この頃、ゼムストヴォ活動家の間でも、専制に抵触しない形で政治参加の道を模索する動きが出ていた。中心人物の一人であったのがモスクワ県ゼムストヴォ参事會議長のД.Н. シーポフである。スラヴ主義の影響を受けたシーポフは、社会からの意見表出が国家の意思決定に影響を与える仕組みを模索し、1899年11月に創立されたサークル「ベセーダ」<sup>(34)</sup>にも参加していた。「ベセー

## 帝政末期のロシア自由主義における初期スラヴ派の遺産とその継承

ダ」は自由主義的なゼムストヴォ活動家が政治問題を議論した非公式の集まりである。トルベツコイも発起人のひとりであった。専制との協調を重視するシーポフはそこで立憲主義的な態度を鮮明にすることはなかった。<sup>(35)</sup>ゼムストヴォの世界に限っては、この時期、政治的傾向の明確なИ.И.ペトルンケーヴィチよりも慎重なシーポフのほうが広い支持を得ていたということができる。<sup>(36)</sup>

シーポフは、政治参加に至る道として、政府が開く審議会へのゼムストヴォ代表の参加の可能性を探った。1902年の初め、ヴィッテを議長とする農業窮乏問題特別審議会が設置されると、<sup>(37)</sup>この審議会への参加について討議するために、<sup>(38)</sup>5月、ゼムストヴォ代表者による協議会が開かれた。この会議は、開催を主導したシーポフの名をとり「シーポフ大会」と呼ばれる。4月に就任していた内相のプレーヴェはこれを違法とし、ニコライ2世に求めて参加者に譴責を加えさせた。その中にはシーポフも含まれていた。<sup>(39)</sup>特にプレーヴェを不快にしたのはそこで国政への参加の問題が論じられたことであった。しかし、プレーヴェといえどもゼムストヴォ活動家との関係を悪くするわけにはいかなかった。6月、П.Б.ストルーヴェによってシュトゥットガルトで立憲派の雑誌『解放』が創刊されたからである。プレーヴェはシーポフら稳健派を懷柔しようとし、立憲派と手を切ることを条件に、ゼムストヴォ活動家に行政への参加の道を開くことを提案した。シーポフもこれを歓迎し、積極的に応えようとした。<sup>(40)</sup>

プレーヴェと激しい政治闘争を繰り広げるヴィッテもシーポフらの歓心を買おうとした。7月にヴィッテと会った際、シーポフは、ヴィッテがかつて書いた、ゼムストヴォが専制とは相容れないものだとする「意見書」の真意を問い合わせた。<sup>(41)</sup>この機会に気になっていたヴィッテのゼムストヴォ観を知ろうとしたのである。ヴィッテは、意見書が与えた印象は誤解に基づくものであり、自分はゼムストヴォに敵対しているわけではないと述べた。意見書を書いたのは、一つには立憲制への移行が不可避であることをニコライ2世に伝えるためであり、それは臣としての自分の義務であるとヴィッテは述べた。もう一つの意図は、ゼムストヴォを政治への関与から遠ざけ、本来の仕事に専念させることであるとされた。シーポフはそれなりに納得したようであるが、あまり説得力のない言い訳である。ゴレムイキン内相のもとで内務省がゼムストヴォに宥和的

な態度をとったとき、政府内でヴィッテがこれに敵対したことは明らかである。それをなかったことにしようとするほど、ヴィッテはゼムストヴォ<sup>(42)</sup>稳健派に取り入る必要を感じていたのである。

食糧供給事務をゼムストヴォの管轄から外したことについても、シーポフはヴィッテに事情を尋ねた。ゼムストヴォの権限を縮小するものとして、ゼムストヴォ活動家の間で評判のよくなかった政策である。ヴィッテは内相シピヤーギンの意向であって自分は反対だったが抗しきれなかったと弁解した。<sup>(43)</sup> 農業窮乏問題特別審議会にゼムストヴォ代表を呼ばなかった理由についても、ヴィッテは、自分は入れたかったがシピヤーギンらが反対して実現しなかったと述べた。<sup>(44)</sup> すべては4月に暗殺されたシピヤーギン内相のせいにされた。盟友であったシピヤーギンを悪者にして非難をかわそうとするところにヴィッテの性格の一面が表れている。

シーポフら稳健派には、政府の要人から手を差し伸べられたことは政治参加への道を開く得難い機会と思われた。これに比べれば『解放』に集う立憲派と手を結ぶことは現実的な選択肢ではなかった。『解放』の側も同じであった。ストルーヴェはかつて持っていた稳健派との連携という考えを捨てた。偽名を使って『解放』に寄稿していたミリュコーフもこれを歓迎した。<sup>(45)</sup> 翌1903年の2月、ミリュコーフは「スラヴ派」のゼムストヴォ活動家と立憲派との間には深刻な意見の相違があるとし、手を切るべきことを説いた。<sup>(46)</sup> 大同団結よりも政治的純化を求めたのである。

この年の8月、プレーヴェとの政争に敗れたヴィッテが蔵相の任を解かれる。翌1904年1月、日露が開戦し、激しい歴史のうねりが始まった。ペテルブルクでは立憲派の組織として解放同盟が秘密裡に創立された。2月、戦争がもたらす社会の激しい動きを見ることなく、チチェーリンが世を去った。

## V 「スラヴ派」の敗北

1904年7月、ゼムストヴォに対して強い猜疑心を持っていたプレーヴェが暗殺され、<sup>(47)</sup> 8月、開明的とされたスヴァトポルク＝ミルスキイが内相に就任する

### 帝政末期のロシア自由主義における初期スラヴ派の遺産とその継承

と、合法的なゼムストヴォ大会開催への期待が高まった。大会は11月6日、<sup>(48)</sup> 104名の参加を得てペテルブルクで開かれ、シーポフが議長を、追放を解かれてパリから戻ったばかりのペトルンケーヴィチが副議長を務めた。<sup>(49)</sup> 大会では立法への参加をめぐる問題が取り上げられた。シーポフが中心となって提出した原案は、立法への参加を求めるにとどまり、権力のあり方への言及を避けていた。当然、ペトルンケーヴィチはこの案を強く批判した。しかも、これに先立つ10月、解放同盟は2度目の大会を開き、そこで憲法を求めて政府に大衆的圧力をかけるという戦術を採択していた。立憲派の批判を受けたシーポフは孤立し、新しい国民代表機関への立法権の付与を求める対案が可決されることになる。ゼムストヴォ活動家の運動全体に対するシーポフの影響力は明らかに低下<sup>(50)</sup> していた。

政治化の気運が高まるなかで、シーポフの妥協的な態度が立憲派から批判を浴びるのは避けがたいことであったが、さらに広くスラヴ主義そのものに対する批判的な視点を提示したのが、「ベセーダ」サークルの発起人の一人でもあったC.H. トルベツコイである。<sup>(51)</sup> トルベツコイはもともとソロヴィヨーフの普遍主義を継承する学者であった。ソロヴィヨーフと同様社会の有機的統一への強い関心を持ち、キリスト教は個人と社会を結びつけるものだとして、社会の統一性と個人の自由の両立を説いていた。<sup>(52)</sup> もとよりチチェーリンの個人主義とは相容れない思想であったが、現実の問題を見る際に形而上学的基礎が不可欠であると考える点は二人に共通していた。

トルベツコイが政治的関心を強めるにいたったのは1891年から翌年にかけての大飢饉がきっかけである。<sup>(54)</sup> トルベツコイにとって、ロシアを救う唯一の道は社会の力を組織し統治に参加させることであり、権力の制限なしに政府の恣意を除去することは不可能であった。彼は政治改革に期待をかけ、すべての問題の解決をそこに求めた。<sup>(55)</sup> トルベツコイは早くからスラヴ主義と距離をとっており、政治改革の道について考える際にもロシアの独自性を重視しなかった。当然にその立場はシーポフよりペトルンケーヴィチに近いものになった。

注目されるのはヨーロッパの一体性に対する彼の信念である。もともとトルベツコイの哲学はギリシア哲学とキリスト教の調和を目指すものであった。異

なった教派のキリスト教も、トルベツコイは対立的に捉えるべきではないと考えた。<sup>(56)</sup> このような哲学的立場からヨーロッパの一体性の強調、ヨーロッパ主義の主張が導かれるのは自然なことであった。特にトルベツコイはヨーロッパの中心に位置するドイツを高く評価した。社会立法にも好意的であり、ドイツはロシアが改革を進める際のモデルとされた。<sup>(57)</sup> 対外政策においても、トルベツコイは露独仏の同盟こそがヨーロッパに平和をもたらすと信じていた。他方、イギリスに対しては、ヨーロッパの一体性を脅かす存在として警戒の目を向けた。<sup>(58)</sup> 日英同盟に励まされた日本との間に始まった戦争が、黄禍論に共鳴する彼に激しい不安をもたらしたことは言うまでもない。<sup>(59)</sup>

1904年12月、旅順が陥落する。先行きの暗い戦況を背景に、ゼムスキー・ソボールの提唱者であったキレーエフは、国家評議会に選挙された60人の代表を加える案をニコライ2世に送った。翌年1月、血の日曜日事件が起き、社会の動搖が強まる。2月、法案審議への国民代表の参加を検討するようにとのブルイギン内相宛勅書が出されると、キレーエフはこれをゼムスキー・ソボールの復活として喜び、農民を排除したり、立憲派のインテリゲンツィヤをたくさん入れたりすることのないように願った。<sup>(60)</sup> ブルイギン内相は勅書に従って国会を構想し、彼のもとでまとめられた案は大臣会議に付議された。<sup>(61)</sup>

在野の立憲派は政府部内で進む事態收拾の動きを待っているほど悠長ではなかった。戦況が悪化するにつれ、解放同盟の動きが活潑になる。前年に渡米しシカゴ大学で講義を行っていたミリュコーフも、血の日曜日事件の知らせを受けると直ちに帰国した。4月21日、125名が参加してゼムストヴォ大会が開かれた。大会は代表制開設を求める決議を採択し、そこには3つの選挙方法が併記されていた。第1は農民・労働者を含む直接選挙である。第2は二段階選挙であり、ペトルンケーヴィチはこれに賛成であった。第3はゼムストヴォに労働者・農民代表を加えてそこで選挙を行うという方法であり、シーポフはこれを支持していた。3つのうち、圧倒的多数の支持を得たのは最も急進的な第一案であった。<sup>(63)</sup> 時代の勢いはペトルンケーヴィチさえ追い越していたのである。立憲派にとってキレーエフやシーポフの提案する制度は紛い物にすぎなかつた。スラヴ主義は過去のものであり、それを自由主義の中に持ち込むのは時代錯誤

帝政末期のロシア自由主義における初期スラヴ派の遺産とその継承  
であるとみなされるようになっていた。<sup>(64)</sup>

5月、日本海海戦でロシア艦隊が壊滅し、戦争の行方が絶望的になると、政治変革を求める声はいっそう高まった。8月、ニコライは国会開設についての大蔵会議案を承認する詔書を出した。<sup>(65)</sup>しかし、ツァーリに法律制定の決定権を残し、国会に立法権を認めない案が社会に受け入れられることはなかった。時代はもはや専制の原則に手を触れない形での収束を許さなかつたのである。9月末の鉄道労働者のストライキは社会全体に波及し、政治体制は危機的状況に陥った。C.H. トルベツコイが世を去ったのはその少し前である。

## VII おわりに

1905年10月12日、モスクワで立憲民主党（カデット）の創立大会が行われ、ミリュコフは指導者として開会演説を行った。そこにもたらされたのが10月17日詔書宣布の報である。これは自由主義運動全体にとって大きな出来事であった。翌月、10月17日同盟（オクチャブリスト）が設立され、シーポフは創設者のひとりとして党中央委員会の初代議長になった。自由主義者は、急進派のカデット、稳健派のオクチャブリストに大きく二分されることになったのである。立憲派を敵視するキレーエフは10月詔書をロシアにとっての破局とみなし<sup>(66)</sup>た。しかし、同じく詔書に反撥した黒百人組も、彼にとっては共感することのできない人々であった。粗野な極右派が示す反ユダヤ主義や外国人に対する偏狭な態度は、キレーエフには受け入れ難いものだったのである。<sup>(67)</sup>キレーエフの立場は今や右派とも左派とも和合しえなくなっていた。

大臣会議議長になったヴィッテはオクチャブリストをはじめとする自由主義右派に期待をかけており、組閣に際して、ゼムストヴォや市会で活動する在野の有力者を閣僚候補にしようとした。シーポフには会計検査院長、同じく10月17日同盟創設者のひとりである A.I. グチコフには商工相のポストが提案された。文相に擬されたのが E.H. トルベツコイである。彼は C.H. トルベツコイの弟でやはりソロヴィヨーフの影響を強く受けた学者であった。カデットの中央委員会委員ではあったが、もともと党派的な考え方とは無縁であり、統一の

理念を掲げ、政府や他党との相互の理解と信頼を重視していたのである。<sup>(68)</sup>

しかし結局彼らはヴィッテの提案を受けなかった。内相に予定されていた保守的なドゥルノヴォーへの嫌悪も辞退の大きな理由であった。後にストルイピンのもとで外相になったイズヴァリスキーは回想の中で、稳健派との協調を困難にしたドゥルノヴォーの内相就任をヴィッテが諦めなかつたことに疑問を呈するとともに、自由主義者が党派的な事情からヴィッテに協力しなかつたのは大きな誤りであり、それがロシアの破局につながつたとしている。<sup>(69)</sup><sup>(70)</sup>

1906年3月の第一ドゥーマ選挙では、カデットが最も多くの議席を獲得し第一党になった。オクチャブリストが獲得したのはその10分の1に過ぎなかつた。カデットの領袖ミリュコフは10月詔書を書いたヴィッテとは互いに評価し合う関係であった。しかし、党の指導者として、彼は自分たちのプログラムを受け入れられないヴィッテを支持することはできなかつた。<sup>(71)</sup> 4月22日、展望を失ったヴィッテは大臣会議議長の職を辞した。5月5日、ゴレムイキンが後任の議長になるが、ドゥーマと衝突して辞任し、7月8日、ストルイピンが後を継ぐ。翌9日、彼はドゥーマを解散した。シーポフにとってこれは犯罪的ともいうべき行為であった。<sup>(72)</sup> ストルイピンが協力を求めたとき、シーポフは10月詔書の原則が守られないことを理由に辞退した。シーポフにとってストルイピンへの協力は、たとえオクチャブリストに有利ではあっても、自分の政治的信条に悖ることであった。

オクチャブリストの中でシーポフは孤立しつつあった。党内ではストルイピンを支持する勢力が強まっていたのである。その代表が第一ドゥーマの選挙で落選していたグチコフである。グチコフは党派闘争に情熱を燃やすタイプの、シーポフとは肌合いを異にする政治家であった。<sup>(73)</sup> 8月、先鋭化する革命運動に対処するためにストルイピンが軍事野戦裁判所を導入しようとしたことで、党内部の対立が顕在化する。10月詔書に謳われた市民的自由を重視するシーポフにとって、正式の司法手続によらずに被疑者を処罰する軍事野戦裁判所は受け入れ難いものであった。グチコフが導入に賛成であることが明らかになったとき、もはやシーポフには変質した党にとどまる理由はなかつた。9月7日、彼は10月17日同盟のモスクワ中央委員会議長を辞し、同時に党を離れた。<sup>(74)</sup> 社会と

## 帝政末期のロシア自由主義における初期スラヴ派の遺産とその継承

政府の間の協力の道を模索した彼の歴史的役割はここに終わった。

1908年以降、オーストリア＝ハンガリーのボスニア・ヘルツェゴヴィナ併合に伴って世論が激しく盛り上がり、ストルイピン内閣のイズヴォリスキー外相を辞任に追い込んだ。その際、ミリュコフは内閣を批判するカデットの指導者として外相攻撃の先頭に立った。もともと西欧主義的な立場に立つ自由主義者たちが、ヨーロッパの分裂と汎スラヴ主義の流れをとどめるどころかそれに棹差すことになったのは皮肉と言うほかない。第一次世界大戦が始まると、E.H. トルベツコイは、ソロヴィヨーフを引きつつコンスタンチノープルという都市を得ることの宗教的意味を説き、普遍主義の旗のもとにバルカンの諸民族解放のための戦争を正当化した。<sup>(75)</sup> ここにいたってスラヴ派対西欧派という対立軸はその基本的な意味を失ったと言うことができる。

- (1) ソヴィエト期における自由主義研究として最も重要なものは以下の二点である。  
*Китаев В.А. От фронды к охранительству: из истории русской либеральной мысли 50–60-х годов XIX века.* М., 1972; *Пицумова Н.М. Земское либеральное движение: социальные корни и эволюция до начала XX века.* М., 1977.
- (2) ロシアの思想家を特徴づける際、スラヴ派対西欧派という二項対立の図式がしばしば用いられ、自由主義者は西欧派と同一視されることが多い。しかし、条件を異にするロシアが西欧と同じ道をそのまま辿ることは考えられない以上、純粹かつ絶対的な西欧派なるものはありえない。多くの思想家は西欧派的な要素とスラヴ派的な要素を併せ持っている。
- (3) 初期スラヴ派が必ずしもすべての面で自由主義的であったわけではない。  
Ю.Ф. サマーリンはロシア国家という外枠に対しては固い見方をとっており、西部辺境や沿バルト地域の問題をめぐる彼の立場は自由主義的とは言い難いものであった。*Нольде Б.Э. Юрий Самарин и его время.* М., 2003. С. 422. 国家の外枠に対する見方と内部の政治秩序に対する見方の関係は重要であるが、本稿ではその問題は視野の外に置く。
- (4) Andrzej Walicki, *The Slavophile Controversy: History of a Conservative Utopia in Nineteenth Century Russian Thought*, tr. by Hilda Andrews-Rusiecka (London, 1975), p. 205.
- (5) Ibid., pp. 191-192.
- (6) *Нольде.* Указ. соч. С. 38.

- (7) Цимбаева Е.Н. Русский католицизм. Забытое плошое российского либерализма. М., 1999. С.115; Макарова А.В. В.С. Соловьев и русские каторики: сходство и расхождения в понимании церковного единства и непогрешимости // Соловьевские исследования. Выпуск 1 (73). 2022. С. 34.
- (8) Нольде. Указ. соч. С. 29.
- (9) [Соловьев В.С.] Как пробудить наши церковные силы? // Русь, 19 окт. 1885 г. С. 5-6. この記事は政府上層部の間で物議を醸したとされ、ソロヴィヨーフは掲載したアクサコフに累が及ばないか気遣っている。以下を参照。Мотин С.В. «...Вероятно, у меня найдется для вас что-нибудь менее спорное, чем великий спор» (к истории взаимоотношений И.С. Аксакова и В.С. Соловьева) // Соловьевские исследования. Выпуск 2 (42). 2014. С. 25.
- (10) Walicki, op. cit., pp. 572-573.
- (11) Ibid, pp. 570-571. ソロヴィヨーフは教会の再統合を求める立場から『ロシアと普遍教会』を書き、1889年、検閲を避けてフランスで刊行した。
- (12) Киреев А.А. Славянофильство и национализм. Ответ г. Соловьеву. СПб., 1890. С. 5-6.
- (13) キレーエフは正教に保存された原則が欧米のみならずアジアにも広がりうることを肯定した (Медоваров М.В. Александр Киреев. СПб., 2019. С. 144)。
- (14) Там же. С. 145; Медоваров М.В. К истории взаимоотношений А.А. Киреева и Вл. С. Соловьева // Вестник Нижегородского университета им. Н.И. Лобачевского. 2010. № 1. С. 235.
- (15) John D. Basil, "Alexander Kireev: Turn-of-the-Century Slavophile and the Russian Orthodox Church, 1890-1910," *Cahiers du Monde russe et soviétique*. XXXII (3), Jul-Sept. 1991, pp. 340-343.
- (16) Walicki, op. cit., pp. 524-529.
- (17) Ibid, pp. 529, 575-576.
- (18) Melissa Kirschke Stockdale, *Paul Miliukov and the Quest for a Liberal Russia, 1880-1918* (Ithaca, New York, 1996), pp. 33-35.
- (19) Милюков П.Н. По поводу «Замечаний» Вл. С. Соловьева // Он же. Из истории русской интеллигенции. Сборник статей и этюдов. Изд. 2-е, СПб., 1903. С. 307-308.
- (20) Милюков П.Н. Разложение славянофильства. Данилевский, Леонтьев, Вл. Соловьев // Он же. Из истории русской интеллигенции. Сборник статей и этюдов. Изд. 2-е. СПб., 1903. С. 300-301, 306.
- (21) 竹中浩「初期スラヴ派の政治思想—コンスタンチン・アクサコフの政治観を手掛りとして」『国家學會雑誌』第93卷第7・8号（1980年7月）152頁。

帝政末期のロシア自由主義における初期スラヴ派の遺産とその継承

- (22) Самарин Ю.Ф. Предисловие // Хомяков А.С. Церковь одна. Изд. 2-е. Монреаль, 1975. С. 11. 竹中浩『近代ロシアへの転換—大改革時代の自由主義思想』(東京大学出版会、1999年) 204-205頁も参照。
- (23) Чичерин Б.Н. Конституционный вопрос в России (Рукопись 1878 г.). СПб., 1905. С. 15,19. 竹中浩『模索するロシア帝国—大いなる非西欧国家の一九世紀末』(大阪大学出版会、2019年) 61頁も参照。
- (24) Кацапова И.А. История и современность: о дискуссии между Б.Н. Чичериным и Вл.С. Соловьевым // Философские науки. 2012. № 3. С. 47-50.
- (25) 竹中『模索するロシア帝国』96頁。
- (26) Stockdale, op. cit., p. 54.
- (27) 鳥山重人「ペー・エヌ・ミリュコーフと『国家学派』」同『ロシア・東欧の國家と社会』(恒文社、1985年) 266, 273-274, 302-305頁。
- (28) Stockdale, op. cit., p. xii.
- (29) 鳥山、前掲注(27)325頁。
- (30) このとき熱心に支持したП.Д.ゴロフヴァストフは、1860年代に代表制を求めた人の一人であった(竹中『近代ロシアへの転換』214頁)。
- (31) Бадалян Д.А. Исторический опыт земских соборов и систематизации законодательства в России. К 370-летию принятия соборного уложения и 470-летию созыва первого земского собора // Сборники Президентской библиотеки. Серия «Историческое правоведение». Выпуск VII. СПб., 2019. С. 135-136; Медоваров. Александр Киреев. С. 115-116.
- (32) Там же. С. 117-118.
- (33) Там же. С. 121.
- (34) 「ベセーダ」サークルについては、Terence Emmons, "The Beseda Circle, 1899-1905," *Slavic Review*, vol. 32, no. 3 (Sept. 1973), pp. 461-490を参照。
- (35) Klaus Kröhlisch, *The Emergence of Russian Constitutionalism, 1900-1904* (The Hague, 1981), p. 166.
- (36) Ibid., pp. 170-171.
- (37) この審議会については、Sidney Harcave, *Count Sergei Witte and the Twilight of Imperial Russia: A Biography* (Armonk, New York, 2004), p. 90を参照。
- (38) Kröhlisch, op. cit., pp. 167-168; Шелюхаев С.В. Д.Н.Шипов. Личность и общественно-политическая деятельность. М., 2010. С. 49.
- (39) Kröhlisch, op. cit., pp. 174, 177.
- (40) Richard Pipes, *Struve: Liberal on the Left, 1870-1905* (Cambridge, Mass., 1970), p. 324.

- (41) この意見書については、竹中『模索するロシア帝国』105-106頁を参照。
- (42) Шелохов. Указ. соч. С. 51-52; Kröhlich, op. cit., pp. 175-176.
- (43) Шипов Д.Н. Воспоминания и думы о пережитом. М., 2007. С. 209. この問題については、竹中『模索するロシア帝国』109頁を参照。
- (44) Шипов. Указ. соч. С. 210-211; Kröhlich, op. cit., pp. 177-178.
- (45) Pipes, op. cit., pp. 326-327.
- (46) Kröhlich, op. cit., pp. 179-180.
- (47) プレーヴェ暗殺の経緯については、サヴィンコフ著、川崎浄訳『テロリスト群像（上）』（岩波現代文庫、2007年）3-114頁に詳しい。
- (48) Трубецкая О.Н. Князь С.Н. Трубецкой. Воспоминания сестры. Нью-Йорк, 1953. С. 85.
- (49) Kröhlich, op. cit., p. 229. 加納格『ロシア帝国の民主化と国家統合』（御茶の水書房、2001年）69頁。ペトルンケーヴィチの参加については、Charles E. Timberlake, "Ivan Il'ich Petrunkevich: Russian Liberalism in Macrocosm," in: ditto (ed.), *Essays on Russian Liberalism* (Columbia, Mis., 1972), p. 37を参照。
- (50) 加納、前掲注(49)69-71頁。
- (51) トルベツコイは「わが国の文化の矛盾」と題する1894年の論文でスラヴ主義を根本的に批判していた（Чадов М.Д. Славянофилы и народное представительство. Политическое учение славянофильства в прошлом и настоящем. Харьков, 1906. С. 85）。ユーラシア主義者のH.C. トルベツコイは彼の子である。
- (52) トルベツコイには形而上学的社会主义のような大胆な主張もあった（Martha Bohachevsy-Chomiak, Sergei N. Trubetskoi: An Intellectual among the Intelligent in Prerevolutionary Russia (Belmont, Mass., 1976), p. 61)。
- (53) 根村亮「セルゲイ・トルベツコイのロゴス論について」『スラブ・ユーラシア学の構築』研究報告集』第12号（2006年）52頁。
- (54) Трубецкая. Указ. соч. С. 19.
- (55) Там же. С. 37.
- (56) 根村、前掲注(53)47頁。
- (57) Bohachevsy-Chomiak, op. cit., p. 126.
- (58) Ibid., pp. 118-119.
- (59) Трубецкая. Указ. соч. С. 72. トルベツコイの黄禍論については、竹中『模索するロシア帝国』210頁を参照。
- (60) Медоеваров. Александр Киреев. С. 45.
- (61) 加納、前掲注(49)117-121頁。
- (62) Kröhlich, op. cit., p. 230.

帝政末期のロシア自由主義における初期スラヴ派の遺産とその継承

- (63) 加納、前掲注(49)72頁。
- (64) Чадов. Указ. соч. С. 64.
- (65) 加納、前掲注(49)127頁。
- (66) Медоваров. Александр Киреев. С. 49, 130–131.
- (67) Там же. С. 52.
- (68) Половинкин С.М. «Поро начинать Великую Литургию» // Трубецкой Е.Н. Из прошлого. Томск, 2000. С. 11.
- (69) Harcave, op. cit., pp. 182–185.
- (70) *Recollections of A Foreign Minister (Memoirs of Alexander Iswolsky)*, tr. by Charles Louis Seeger Hutchinson (Garden City, New York, 1921), pp. 13, 127.
- (71) Harcave, op. cit., pp. 185–186; Шипков П.Н. Три попытки. (К истории русского лже-конституционализма). Париж, 1921. С. 24–25.
- (72) Шипов. Указ. соч. С. 466–468.
- (73) Там же. С. 488.
- (74) Там же. С. 496–497.
- (75) Трубецкой Е.Н. Национальный вопрос. Константинополь и Сватая София. Изд. 2-е. М., 1915. С. 24–25.